

安房集会のお誘い

池田恵美子（安房支部）

■青木繁《海の幸》誕生の漁村

今回の研究集会は、青木繁が重要文化財の名画《海の幸》を描いた館山市富崎地区が舞台です。布良（めら）と相浜（あいはま）という2つの集落からなり、古代より朝廷献上物であるアワビ漁が盛んで、江戸期以降はマグロ延縄漁発祥の地として栄えた漁村でした。布良沖の鬼ヶ瀬は複雑な海域で、豊かな漁礁ですが、危険な海流のため水難事故が絶えませんでした。冬、真南の水平線上に赤く輝くカノーブスは布良の漁師の魂といわれ、「布良星」という呼び名で全国に知られています。

1904年夏、東京美術学校を卒業した青木繁は、友人の坂本繁二郎・森田恒友、恋人の福田たねとともに房州布良を訪れました。4人が滞在した小谷家の当主喜録は、村議など多数の要職にあり、帝国水難救助会の布良救難所看守長でした。折しも日露戦争にあり、沿岸警備も兼ねていた布良救難所の報告には艦砲射撃の記録もある一方で、青木はひと夏の青春を謳歌し、多くの作品を描きました。

布良は、天富命が上陸したという神話のふるさとで、阿由戸の浜から男神山・女神山がそびえています。神話に傾倒していた青木は、小谷家に隣接した布良崎神社の勇壮な祭礼に衝撃を受けたと思われます。御浜下りといって、漁師の男衆は1トンの大神輿を担いだまま海に入っていくのです。海から上がった男衆の焼けた肌は、濡れて夕日を浴び黄金色に輝きます。布良崎神社の島田吉廣親方は、ここからインスピレーションを受け、重要文化財《海の幸》が生まれたのではないかと説きます。

■館山と近代水産業の黎明

最近、小谷家の納戸から当時の古文書類が発見されました。朝鮮王朝の末裔（李俊鎔）や著名な書家文人の署名がある書画などもあります。特に注目すべきは、水産伝習所の初代所長、関澤明清からの直筆書簡です。関澤はウィーンやフィラデルフィア万博で欧米の水産業を見聞を通して、鮭鱒の人工ふ化や捕鯨銃、缶詰技術などを導入し、日本の近代水産業を発展させた先覚者です。

1890年9月10日付の書簡は、

千葉県歴教協の集大成が

1枚のDVD（2012年改訂版）になりました

このDVD（「わたしたちの歩み 2012年改訂版」）は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならないと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

「生徒御地出張中にご多忙の中、特に漁具その他の説明を煩し、生徒に於いても満足致して居り候」と書かれており、開校2年目の水産実習で布良を来訪したことがわかります。さらに、謝意をこめて「重要水産動植物図」を贈る旨も記されており、小谷家の長押に架かっている3枚の魚介図がそれだと気づきました。1889年農商務省制作の貴重な印刷物は、100年もの間、色あせることなく漁村の一室に掲げられていたのです。青木は画家ですから、この魚介図に興味深く眺めていたことでしょう。布良から友人に宛てた青木の絵手紙には、魚介の名前が40種も列挙され、海の幸に恵まれた漁場であることを伝えています。文末には「今は少々制作中だ、大きい、モデルを沢山つかって居る」と書かれ、《海の幸》に取り組むようすが伺えます。

1893年、関澤は水産伝習所長を辞して館山に居を移し、渋沢栄一や大倉喜八郎とともに資金を集め、自ら水産会社を興します。江戸期から勝山(鋸南町)で捕鯨を続けてきた醍醐組とともに館山から遠洋に出漁し、日本で最初のマッコウクジラ捕獲に成功しています。1901年には、官制となった水産講習所の館山実習場が開かれ、戦後の東京水産大学を経て今なお東京海洋大学のセミナーハウスとなっています。日本列島の中心で太平洋に開かれた館山は、近代水産業発展の拠点であったといっても過言ではないでしょう。

■内村鑑三に示唆を与えた村長

奇しくも、内村鑑三は水産伝習所の教官として関澤書簡の実習に同行していました。このとき神田吉右衛門という老人と出会ったことが人生の大きな転機になったと、『内村鑑三全集』の「私が聖書研究に従事するようになった由来」に記されています。

神田は前年合併した富崎村の初代村長で、富崎小学校には大きな顕彰碑があります。学校制度施行の際、学資蓄えの義捐金を募り、さらに採鮑業を村の共通財産として学校をつくりました。全村が大火のときも奔走して村民を救済し、コレラが蔓延したときも療養介護や予防、隔離などに努めました。海事では、漁船の改良、水産増殖、海難救助に尽くしています。これらの村政を神田とともに進めたのが、青木の滞在を受け容れた小谷喜録でした。内村がこの村長との出会いを契機として実業教育を退き、聖書研究への道に進んだのは、不敬事件の前々年のできごとです。

■新たな歴史をつくるまちづくり

朝鮮馬山に千葉県漁業移民の「千葉村」が建設されてから2年後の1907年、館山湾で訓練をしていた水産講習所の教育実習船「快鷹丸」は、朝鮮海域で嵐に遭遇しました。朝鮮の漁師に救助されましたが、4人の学生が殉難し、韓国最東端の岬に遭難記念碑が建てられました。戦争を経て、碑は終戦時に倒され土中に埋められましたが、70年代に心ある韓国人らによって掘りおこされ再建されていたのです。

遭難100年目にあたる2007年、安房支部では、東京海洋大学長や水産大学卒業生らとともに参詣で訪韓しました。日本船の遭難記念碑を守ってくれている漁師ら100人と交流したところ、「漁民にとって国境問題よりも、救助し合って生きていくことが大事である。海に生きる男同士の友情の証として、この碑を未来に残さなくてはならない」と語った言葉が忘れられません。館山でも、同じ時代の遭難供養碑を見ることができるのです。

青木繁が滞在した漁村の歴史的背景を調査することで、多面的な近代史が浮き彫りになりつつあります。しかし、かつて日本一の人口密度であった漁村も少子高齢過疎が進み、富崎小学校は昨春統廃合されてしまいました。有形無形の文化遺産を教育と地域活性化活かした「館山まるごと博物館」をめざす安房支部の実践を、多くの方に見聞していただきたいと本集會を企画しました。みなさんのご参加を心からお待ちしています。

「日韓歴史教科書ワークショップ」に参加して

若杉 温 (日本史部会)

11月23日(金)から26日(月)まで韓国のソウルを訪れ、韓国東北アジア歴史財団主催の「日韓歴史教科書ワークショップ」に出席し、ワークショップの前後には、ソウル市内や韓国東海岸などのフィールドワークに参加した。

「日韓教科書ワークショップ」は日韓でそれぞれ高校歴史教科書を執筆している大学などの研究者や高校教員、教科書会社の編集者などが参加し、日韓の歴史教育をめぐる教育課程や教科書検定などの問題について、現状を報告し歴史教育のあるべき方向について議論するもので、一般公開をしない形で行われた。具体的には近現代の日韓関係史の教科書記述について相互に報告し意見交換を行った。

日本側からは元東京学芸大学教授の君島和彦先生、埼玉県高校教員の小松克己先生をはじめとする実教出版「高校日本史A」の執筆者を中心に、清水書院の日本史教科書を執筆されている筑波大学の伊藤純郎先生、私若杉のように教科書の指導書のみ執筆者、そして実教出版の編集者の寺川徹氏も参加された。日本史部会からは加藤公明さん、楳澤和夫さん、そして若杉の3名が参加した。韓国側は天才教育という教科書会社の執筆者や編集者を中心に主催者の韓国東北アジア歴史財団の関係者などが参加された。

日本側からの報告は、以下の通りである。まず最初の伊藤報告は、東京書籍と第一学習社日本史Aについて、江華島事件などについてどのような記述がなされているか、両社のものを比較して報告した。この報告には日本側から事実関係について幾つかの質問が出たが、日清や日朝の「修好条規」の表記について清国の朝貢体制を踏まえての表現ではないかとの報告であったが、これは条規という表現が条約の中にあるため、特に欧米との条約と区別したものではないとの指摘が君島先生からあった。私にとっては長年の疑問が解けた瞬間で、大いに勉強になった。

次の君島報告は、来年度から高校で使われる実教『高校日本史A』の今年度の教科書検定の実態と、東京と横浜での教科書採択拒否問題について具体的な内容を報告した。韓国側からは東京や横浜以外にもそのような動きがあるのかという質問が出たが、やはり日本で国家主義的な動きに強い関心があるように感じられた。

加藤報告は実教『高校日本史A』について生徒の教科書認識を具体的に踏まえた上での工夫について報告し、開港期から日露戦争前までの時期の日韓関係の今回の変更点を具体的に報告した小松報告や「ズームイン」「歴史の群像」「歴史を見る」といったコラム的な記述の詳細を述べた楳澤報告と合わせて実教の教科書の特徴を韓国側によく伝えられたと思う。韓国側からは、時間の制約はあったが、事実関係について幾つかの質問があった。また何よりも国家の検定の下で教科書を執筆することの苦労や努力に共感する旨の意見が出て、お互いに励まされた。

若杉報告は本当に授業に役立つ指導書をどのように作るかという趣旨で明治初期の外交を例に具体的に報告した。そして寺川報告は営利事業でありながら、授業の核となる教科書づくりを担うという重大な責務を負う編集者の現状を報告した。教科書執筆と深く関係しながらも、執筆者とは異なる観点からの報告は新鮮だった。

韓国側からは、『韓国史』教科書について、執筆方針や特徴などの報告や植民地期の韓国の近代史についての報告、政治の介入による度重なる教育課程の改編の大変さについての報告などがあつた。植民地期に関する近代史の報告では、三・一独立運動での犠牲者を日本の官憲資料を根拠に数百名と述べるなど、疑問を感じるころが多かったが時間の関係で詳しい議論はできなかつた。土地調査事業についても、申告できずに多数の農民が土地を失つたという日本での常識的な認識とは異なり、三・一運動でも土地回復は農民の要求とはなっておらず、村単位で土地所有権の申告はしていて、失つた土地の大半は共有地であるといった指摘もあつて、日本の保守派の歴史認識を聞くようで、事実認識の難しさを感じた。しかし、韓国での現今の歴史教育での大きな問題は、近年、教科書が「国史」から「歴史」、そしてさらに「韓国史」に変わり、狭い自国認識の反省が計られてきていたが、現政権が歴史教育への介入に踏み切つたことで、教科書の早急な改訂が求められて不十分な内容のものを作らざるを得なかつたという無茶なことがまかり通つているということである。歴史教育が政治介入で歪められることほど、教師や子どもにとって深刻な

事態はない。日韓に共通する重い課題を認識して、お互いに連帯して政治の圧力に対処する必要性を実感した。

ワークショップの合間には、夜のソウルで西大門市場などを訪れて、庶民の台所を見学したり、実教の教科書にも写真のある、清国からの独立のモニュメントである独立門などを見た。そしてワークショップの翌日には、江原道の花津浦海岸をめざして、朝鮮半島を車で4時間前後かけて横断し、東海岸の東海、つまり日本という日本海を韓国側から見た。花津浦には金日成と李承晩の別荘があり、ともに整備されて公開されて、観光名所となっている。まだ朝鮮戦争前に金日成が別荘を建てていた場所が戦争後に韓国領となったとのことで、南北の国境線に近い。そしてその近くの数名先に国境線のある統一展望台からは北側の高速道路などが見えたが、まったく車は走っておらず、人影もなかった。「東部の板門店」といえる場所である。最終日はソウル市内で旧ロシア大使館を始め、高宗が退位後に住んだ王宮跡など、近代の日韓関係の舞台となった場所を君島先生の案内でじっくりと見学した。あれもこれも教材として生徒に見せたいと思うものばかりで、君島先生ならではの詳細的で得た解説に、参加者一同感嘆の連続だった。4日間の日程があつという間に過ぎたが、実に実りの多い学びの旅となった。

■書評 加藤公明・和田悠編『新しい歴史教育のパラダイムを拓く —徹底分析！加藤公明「考える日本史」授業』（地歴社、2012） 第Ⅲ部所収論文

渡辺哲郎（日本史部会）

本稿では加藤・和田編著『新しい歴史教育のパラダイムを拓く』第Ⅲ部にある4つの章（第10～13章）についてコメントをしたい。ただし、紙幅の都合から、それぞれの章についてコメントができず、部分的にピックアップせざるを得なかったことをお断りしたい。

討論授業における問題提起の重要性は4つの章で共通して論じられており、授業の成否に大きく関わってくる。授業の成否とは具体的には子どもたちが意欲的に学ぶことができるかどうかと言える。ただ、この意欲は、榎澤和夫（第11章）の分析によれば、問題提起があつて考えようという意欲が即生まれるのではなく、問題提起に至る過程の中で徐々に学習意欲が高められていくものであり、加藤実践は、魅力的な教材を使って指示と発問を繰り返しながら、生徒を考えざるを得ないような状況に追い込んでいくと論じる。なお、その指示と発問や、子どもたちの疑問に対する回答を以つて、加藤も教え込みではないかという批判もある。榎澤には、生徒が知りたいという内容を教えるのと、教師が教えたいという内容を教えるのでは、その出発点が違うのだということを明記してほしかった。部分だけを捉えて全体を見ない批判には、直接的な言葉で対抗する必要があるからだ。

加藤実践の意義について、三橋広夫（第12章）は加藤の授業を、「国家の論理」を意識化する実践だと位置づける。ここでいう「国家の論理」とは、歴史を国家の立場から見ようとする論理であり、実は子どもたちに根を深くおろしているものであることを、加藤実践の中からも三橋は見出している。三橋は、授業で「国家の論理」の相対化を追求すべきであり、それは東アジアの視点なしには相対化できないと論じる。加藤は1年をかけて「国家の論理」を問題にしているのだと三橋は評価する。

ところで加藤実践については、「うちの学校ではできない」とか「加藤先生だからできる」といった批判を耳にすることがある。加藤の授業は三橋が述べるとおり、東アジアの視点を組み込みながら、子どもたちの興味を呼び起こすような問題設定や発問がなされる。たしかにこれと同じ次元で授業を成立させ、なおかつ加藤実践とは違う教材や発問を準備するのは非常に困難であり、それだけに「加藤先生だからできる」と批判したくもなる。

そこで追試が有効となる。授業実践の追試について、若杉温(第13章)は 先行実践に学びながら、自分なりの考えによって自己実践をつくり出す応用実践だとする。榎澤は、自分の目の前にいる生徒との関わりの中で実践を構築しなければならないと指摘する。小林朗(第10章)は、中学校において、原始古代・中世・近世・近代・2つの大戦・現代と時代区分をつくり、時代区分に1つ討論授業を組み、その際の問題提起は、授業ノートや普通の授業の中での、生徒の授業に対するささやきから生徒の疑問を把握して、関係認識レベルの問題提起により、討論授業を成立させている。つまり、(自分もそうだが)「うちの学校ではできない」という主張に対して、なぜできないかという理由は教師の側にあると言える。第Ⅲ部の執筆者たちは、そのように、はっきり書いてしまっても良かったのではないかと。

加藤実践の意義について、話を戻したい。榎澤は、討論授業を通して自らの歴史認識を生徒自身が創造すること、そのこと自体に価値があると述べる。小林も自らの実践(小林朗「猫の歴史」、『歴史地理教育』753号、2009)を通して、中学生が江戸時代の村社会を主体的に追求したことを重視する。若杉は、自身の秩父事件の授業実践の意義を、生徒が主体的で広い視野に立って、明治前期の民衆運動の歴史的意義を学ぶことに求めている。主体性については、柄澤守が興味深い指摘をしている。「加藤実践を分析する際に、大抵の人は「生徒が学者の追体験をする」というところまでは首肯するが、授業で「子どもの思想形成の自由」を保障する場面に遭遇すると、途端に態度を豹変させて、生徒をなで斬りにしてしまう。加藤実践を正しく分析するには、この部分の評価を避けて通ることはできない、と。「徳政一揆」の授業の最後に「この徳政一揆は市民革命だ」と女子生徒が言った時に、参加者から「訂正なくていいんですか?」と疑問が出された問題とも通じるのではないのでしょうか。」(「日本史部会ニュース」No.355より)

加藤実践の意義として挙げた上記のことは、加藤実践を批判する今野日出晴の所論(今野日出晴『歴史学と歴史教育の構図』、東京大学出版会、2008など)への反駁となりうると考えているが、それは紙幅と評者の力量を大きく超えてしまうので、別の機会に考えてみたい。

■書評

千葉県歴教協世界部会編『地図を書いて学ぶ世界史』その2

米山宏史(歴教協常任委員)

6「マルコ17歳の旅」はマルコとその父、伯父との大都往復の24年間の旅をテーマに壮大な13世紀のユーラシア世界史を描いている。当時のヴェネツィア商人の驚くべき活動範囲とモンゴル帝国の「タタールの平和」が可能にした東西交通路の安定、旅の安全を保障した牌符(パイザ)の重要性、交鈔が示す大都の繁栄などを生き生きと読みとることができる。マルコらの帰国が泉州からホルムズへの海路を通じて行われたという事実からモンゴル帝国のネットワークが内陸部の陸路だけでなく、東シナ海からペルシア湾に至る海路からも構成されていたことを確認したい。『世界の記述(東方見聞録)』がマルコの見聞・伝聞にもとづきながらもマルコから旅の伝聞情報を聞いた物語作家ルスターンによる作品であったことから、東方世界に関する誇張と偏見を多く含んだことは、授業で歴史の伝承という問題を考える場合のよきヒントになる。

7「イブン・バトゥータからの贈り物」は約30年間に3大陸の約50カ国、約11万キロを踏破した彼のまなざしを通じて同時代のユーラシア・アフリカ世界史を描いている。彼の旅の目的が聖地巡礼であるとともに、各地のマドラサに遊学しイスラーム諸学を究めながら現地の王侯貴族と接触して旅を続けたこと、カイロでのペストの被害状況、アフリカ東海岸の海港諸都市の繁栄、異教徒の国ビザンツ帝国への訪問と教会見学の希望、4人の妻を娶ったモルディブでの法官生活、50歳を越えてからの西サハラへのさらなる旅など、彼の軌跡から多くのことを知ることができる。彼の経路

を地図上でたどることによって14世紀の国際関係の広がりも理解できる。さらに彼の旅を可能にしたアラビア語の普及と海陸に張り巡らされたイスラーム・ネットワーク、隊商宿などを備えたイスラームの商業都市機能などを授業で重視したい。

8「宝船がやってきた」は鄭和の遠征が中国の冊封・朝貢体制の南アジア・西アジア(イスラーム世界)への外延的拡大であったこと、それ故に使節団長にムスリムの鄭和が選ばれたこと、大船団が明の経済発展を満載した輸送船であったこと、明の朝貢貿易と結合した琉球王国とマラッカ王国の発展、鄭和の遠征が広域アジアの経済的繁栄を牽引したことなどをわかりやすく論及している。鄭和の南海遠征を中国の冊封・朝貢体制の拡大という文脈で理解するだけでなく、「アジアの交易時代」の開幕という世界商業の画期として把握する視座を提示している。授業では、ヴァスコ・ダ・ガマらのいわゆる「大交易時代」の以前にすでにダウ船とジャンク船が行き交う巨大な海域ネットワークが広がっていたという事実に着目させ、ヨーロッパ中心史観を克服する手がかりにしたい。

「諸地域世界の結合と変容」の諸テーマについて

9「マゼランは世界に何を残したか」はマガリャンイシュ(マゼラン)の航跡を正確に世界地図で確認しながら、彼の世界周航を単なる地理学上の功績だけではなく、貨幣流通にもとづく世界の一体化の起点、スペインの国民国家形成の契機と位置づけ、彼の周航の世界史的意義を論じている。ポルトガル人マゼランがフッガー一家代理人のアロの仲介でスペインの国家事業としての西回りモルッカ諸島航路の開拓を託されたこと、彼が東南アジアの島嶼部の海域ネットワークに突然侵入し、貿易の独占とカトリックの布教を強制し、ラブラブ王との戦いで戦死した理由、その後スペインが本国からの西回り航路が遠いモルッカ諸島の利権を売却し、16世紀後半にはスペイン領メキシコとマニラを結ぶアカプルコ貿易が成立した事情など、マゼランの周航に由来するスペインの対外発展を世界史的・構造的視野で捉える重要性を提起している。

10「トイレはどこだ?」は黒人奴隷貿易(三角貿易)を授業で扱う際の様々な視点を提示している。「黒い積み荷」とよばれた奴隷たちの大西洋(「中間航路」)の「輸送」の驚くべき惨状、奴隷の健康維持のための甲板上でのダンス、奴隷貿易の必要条件としての「砂糖革命」、奴隷商人自身によってではないアフリカ人による奴隷狩り、奴隷狩りに反対しコンゴ国王アフォンソがポルトガル国王に抗議文を提出した事実、奴隷貿易がイギリスに与えた経済的利益、奴隷商人らの奴隷貿易の正当化の論拠(文明化・キリスト教化の「恩恵」)、奴隷の解放運動としての逃亡と反乱(1831年のジャマイカのサムエル・シャープの反乱)、奴隷貿易がアフリカ社会に与えた影響など、奴隷貿易を世界史に位置づけるうえで重要な視点を生徒に対する11の問いかけを通じてまとめている。授業では、上記の論点を教材化し、黒人奴隷貿易とイギリス産業革命の前提条件としての資本の蓄積、その後のアフリカの低開発との関係を正確に把握させたい。

11「キャプテン・キッドの数奇な運命」は生徒の興味をひきやすい「海賊物語」としてのキッドを取り上げ、キッドの海賊活動と17世紀のイギリスの植民政策を絡めて論じている。キッドの海賊行為が個人の利得追求とイギリスのインド進出の先兵という両面性を持っていたこと、略奪品の売却地が北米植民地であったこと、キッドがニューヨークの名誉市民になりながらもイギリス国内の政争と富裕層の利益戦争に巻き込まれ処刑されたことなど、彼の数奇な運命をたどりながら17世紀イギリスの国内政治、対外政策、北米植民地との関係などを複合的に考察できる視座を提示している。海賊キッドは、キッドの生涯を切り口に17世紀のイギリスを軸にした世界史を多面的に考えることのできる可能性を秘めた教材である。(つづく)

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。
chibarekkyo@csc.jp
また、職場や地域のことなどもぜひご投稿ください。(M)

後記 三橋さんの会長就任に伴って、今回から『なかま』の編集が前田に変わりました。